

【臨床・研究】

高齢入院患者における食欲不振と
食形態、活動性、舌圧との関係

お がわ りょう た かわ さき ゆう じ ふじ もと えり か
小 川 亮 太¹⁾ 河 崎 雄 司²⁾ 藤 本 恵里花¹⁾
なが た ゆき こ か とう かず ひろ すぎ はら つとむ
長 田 由紀子¹⁾ 加 藤 和 宏²⁾ 杉 原 勉³⁾

キーワード：入院患者，食欲不振，食形態，活動性，舌圧

要 旨

食欲不振への対策の観点から65歳以上の入院患者58名を対象に食欲不振と食形態、活動性、舌圧との関係を調べた。まず、患者を Simplified Nutritional Appetite Questionnaire 質問票で13点以下の食欲不振群28名、14点以上の非食欲不振群30名に分けた。食形態は嚥下調整食を表す Functional oral intake scale (FOIS) で調べた。食欲不振群は FOIS レベルが低値の食形態が多く、食形態が食欲不振に関与していることが考えられた。活動性の指標である Performance Status (PS) スコアや舌圧は FOIS レベルと相関関係にあり、活動性や舌圧の低値が FOIS レベル低値の食形態を提供する理由となっていることが考えられた。食欲不振への対策としては活動性を PS スコア 1, 2 (歩行や離床など) へ上げること、舌圧を20kPa 以上に上げることが考えられ、これらにより食形態が変わり入院患者の食欲不振は改善される可能性が示唆された。

はじめに

食欲不振は低栄養、サルコペニア等を引き起こすため¹⁾、入院患者では食事の工夫などの対応が行われるが十分ではない。提供される食事の形態(食形態)は食欲低下に影響すること²⁾、また、食

形態の決定には活動性や舌圧の関与すること³⁾が報告されている。そこで入院した高齢者の食欲と食形態、活動性、舌圧との関係を調べ、食欲不振への対策を考える。

対象と方法

安来第一病院へ入院した65歳以上の男性34名、女性24名の計58名を対象に入院理由、年齢、身長、体重、Body mass index(BMI)、食欲、食形態、活動性、舌圧、認知機能を調べた。食欲は入院後の安定した時期に Simplified Nutritional

Ryota OGAWA et al.

1) 安来第一病院看護部

2) 同 呼吸器内科

3) 同 乳腺外科

連絡先：〒692-0011 安来市安来町899-1

安来第一病院 看護部